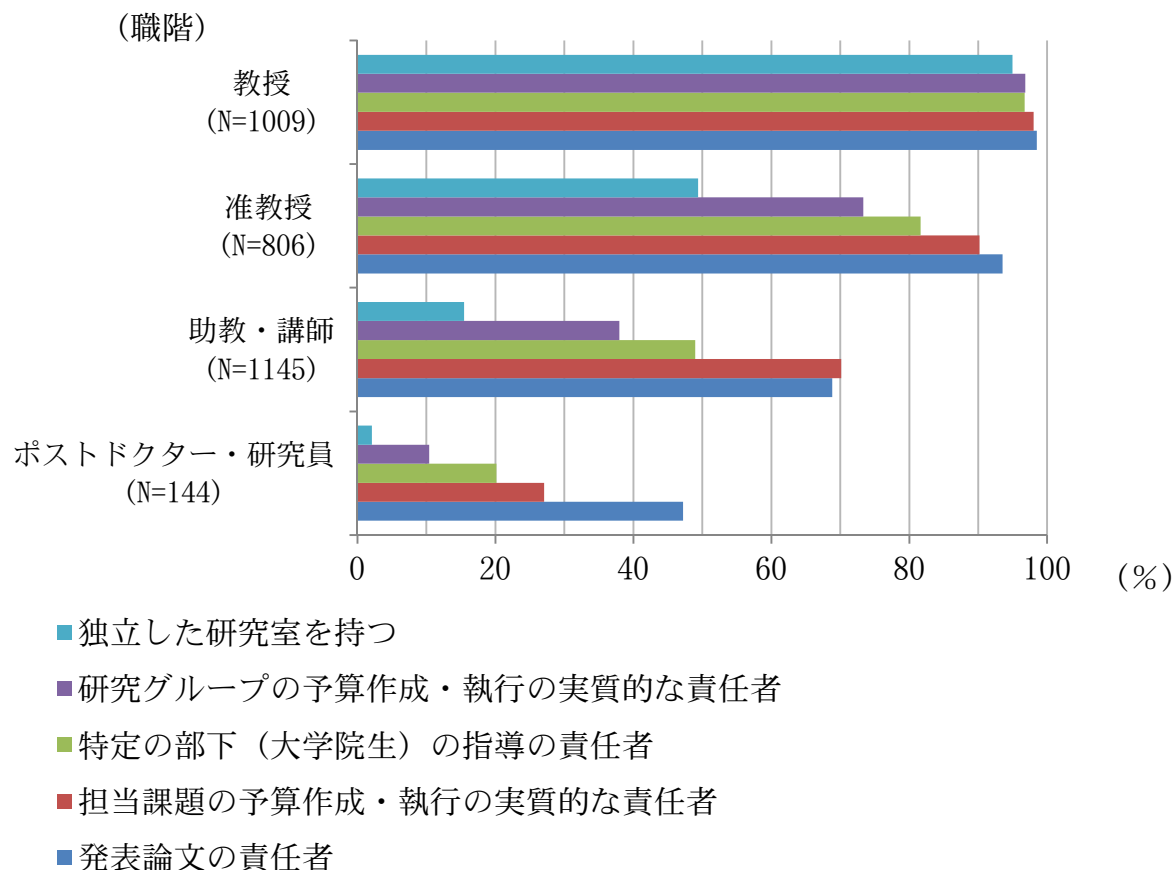


図3-10 研究者の職階別の自立状況

○我が国では、ポストドクター・研究員の段階で、「発表論文の責任者」となっている者が大学で5割を下回るなど、ポストドクターを含めた若手研究者について、キャリアパスの段階に応じた自立状況が不十分。



※ 自然科学系

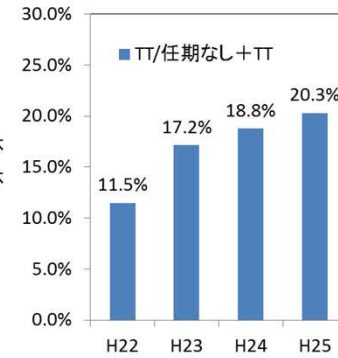
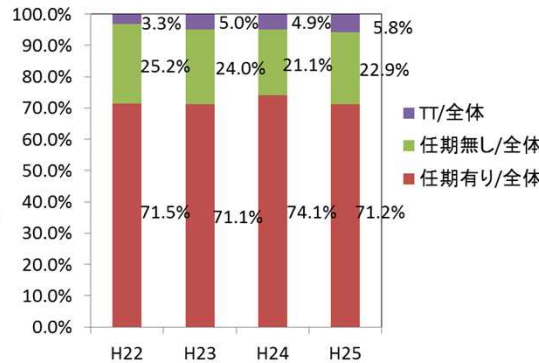
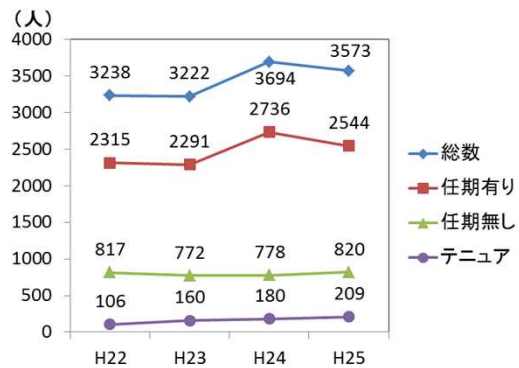
出典：科学技術政策研究所「我が国の大学・公的研究機関における研究者の独立の過程に関する分析」調査資料-195（平成23年3月）を基に文部科学省作成

図3-11 / テニユアトラック制度の普及状況

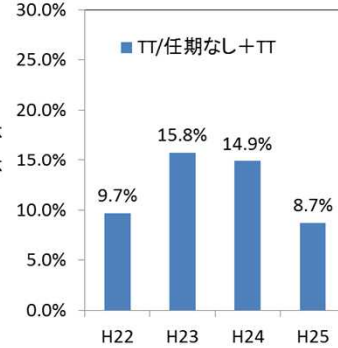
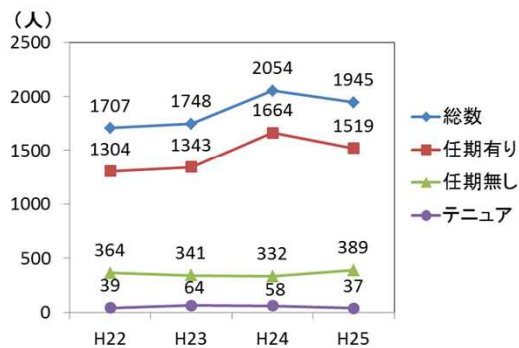
- 新規採用教員数（自然科学系）に占めるテニユアトラック教員数の割合は、新規採用の約6%（任期無し若手教員の新規採用に占める割合は20%）にとどまる。
- 中規模大学では、テニユアトラック制度の定着は比較的進んでいるが、大規模大学での定着は進んでいない。

事業支援機関における自然科学系新規採用教員の雇用形態状況（経年変化）

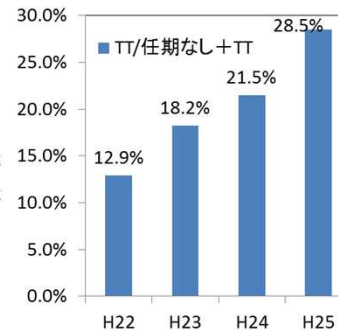
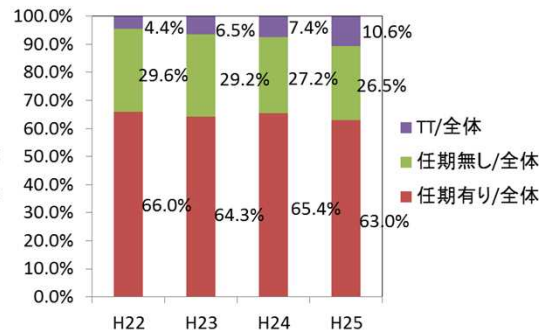
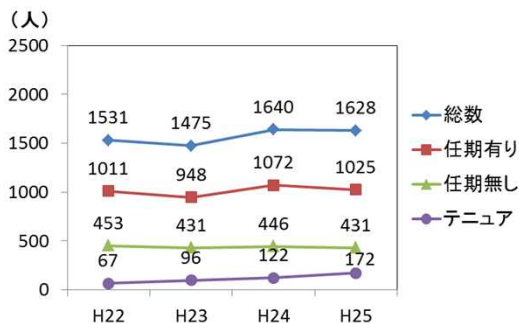
【全機関】



【RU11】



【RU11以外】

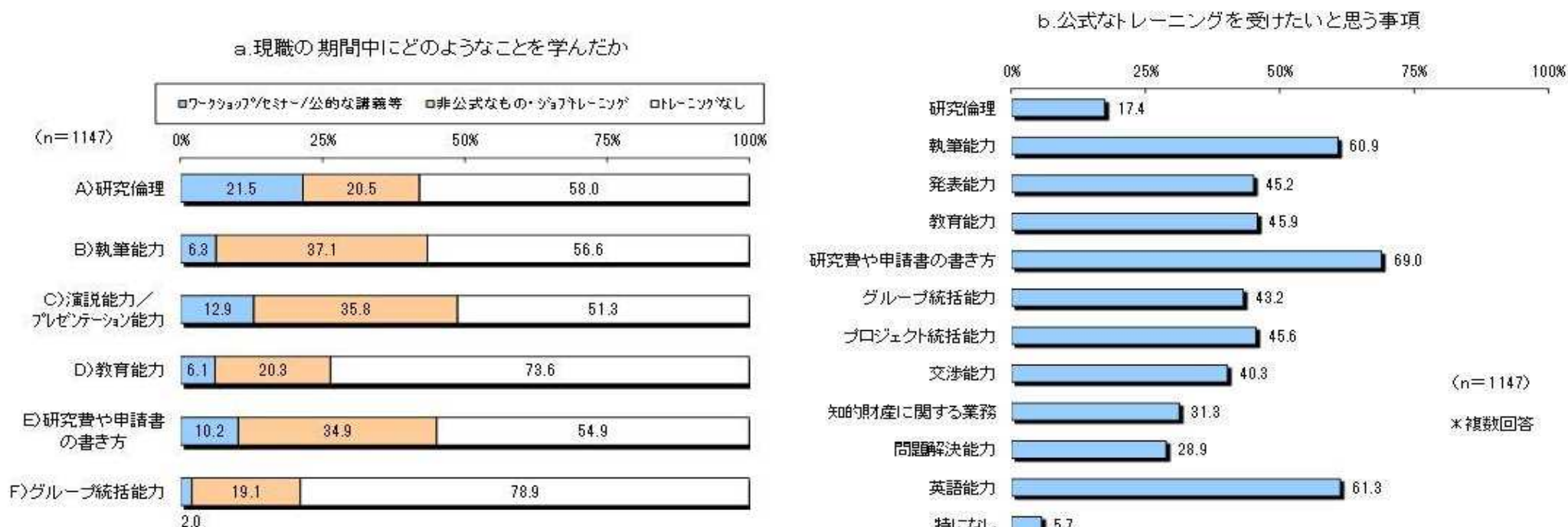


※ 実施機関57機関を対象とし、当該年度に新規採用された自然科学系の若手教員（39歳以下）数を調査し、任期の定め無しで採用された者とテニユアトラック教員として採用された者の割合を算出

出典：文部科学省作成

図3-12 / 若手研究者の研究倫理の習得状況等

- 平成23年の調査時点で、研究倫理を学んだことのある若手研究者は半数に満たない。また、研究倫理に関してトレーニングを受けたいと思っている者の割合が低く、研究倫理に対する意識が低い傾向が見られる。
- 平成25年に日本分子生物学会が実施した研究倫理と不正に関するアンケート結果では、研究不正を減らすための対策として教育が必要と回答した若手研究者の割合は、助教・助手で47.3%、ポストドクターで45.5%と、いずれもほぼ半数であり、平成23年時と比較して、研究倫理に対する意識が徐々に高くなっているものの、十分ではない。



出典：日本学術会議 基礎医学委員会 提言「生命系における博士研究員(ポストドク)並びに任期制助教及び任期制助手等の現状と課題」(平成23年9月29日)
 特定非営利活動法人 日本分子生物学会「第36回日本分子生物学会・年会企画アンケート集計結果」(平成25年8月)